

地獄堕ちの能力：『事件の核心』考察(上)

著者	玉井 久之
雑誌名	研究論集
巻	91
ページ	41-56
発行年	2010-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00006156/

地獄堕ちの能力

——『事件の核心』考察（上）——

玉 井 久 之

要 旨

本編の前半においては、まず『事件の核心』のスコビーの「あわれみ」と「責任感」を分析し、スコビーの「あわれみ」は、相手を見下ろし相手の人生をどうにかできるというエゴイズムを持つことを指摘した。そして「あわれみ」と「責任感」が、スコビーの過去について語られない語りとスコビーの消極的な生き方の原因になっていることを論じた。後半においては、スコビーの「あわれみ」と「責任感」がスコビーとヘレンとの関係、さらにスコビーと神との関係に与えた影響を分析した。そしてスコビーの「あわれみ」がエゴイズムという問題を抱え、またスコビーは致命的な判断ミスを犯しながらも、ルイズとヘレンと神のための自殺において「愛」を表明し、作者もその点を評価している点を指摘した。

キーワード：グリーン、『事件の核心』、カトリック作家

I 序

1946年から書き始められた『事件の核心』は、作者が1941年から1943年までイギリスの政府機関 MI 6 の一員として滞在したシエラ・レオーネが舞台になっている。作者は1971年刊行の全集に収められたこの作品に「序文」を付け、そのなかでこの作品の成立過程を詳しく説明している。「序文」によると、作者は当初はまったく違ったタイプの作品を考えていたらしい。作家の中で作品がある程度形づくられ、登場人物の輪郭がはっきりしたと思われるころ、作者は技術上の問題に非常に悩み、その結果ある選択を迫られている。

しかし絶望の地点に達するはるか前に、私は筆が進まず自信を失ってしまった。そして警察副署長のスコビーが舗装されていない広い道路を歩いていくのを眺めている登場人物のウィルソンを、何ヶ月もの間ホテルのバルコニーから立ち去らせることができなかった。彼をバルコニーから立ち去らせることはある決断を意味した。同じバルコニーと同じ

人物のもとで二つのまったく異なった小説が始まっていた。そして私はどちらを書くべきか選ばなければならなかった。¹⁾

思い悩んだ挙句に、作者は物語の主たる視点となる人物を、当初の計画のウィルソンからスコビーに変えた。その結果、当初グリーンの念頭にあった、ウィルソンを視点にすえた犯罪小説から、「あわれみ」と「責任感」のために自殺にまで追い込まれていくスコビーの心理を描く本格的な小説に変貌したのである。

作者は「序文」の中で、この作品のテーマを「共感（“compassion”）とは別のあわれみ（“pity”）の人間に対する悲惨な効果」（xiii-xiv）だと述べ、スコビーが「あわれみがほとんど醜いごうまんさの表現になりうる」（xiv）ことを示すために創造されたと説明している。さらに作者は「自殺はスコビーの避けられない結末だった。神でさえも自分から救おうという彼特有の自殺の動機は、彼の法外なごうまんさのねじの最後のひとひねりだった。おそらくスコビーは悲劇よりも残酷喜劇の主題であるはずだった」（xv）と述べている。つまりスコビーの「あわれみ」は「ごうまん」の一形態で、神をもあわれんで自殺を遂げるのは「ごうまん」の極みであり、スコビーはアンチ・ヒーローであるということだ。

『事件の核心』は30万部以上を売り上げ、グリーンにとって大成功を収めた作品となった一方で、出版直後から作品に対する手厳しい批判が出された。たとえばオーウェルはこの作品が出版された直後に、この作品の中心的テーマが「徳高い異教徒よりも罪を犯すカトリック教徒のほうが霊的に上である」²⁾というものだと言って批判し、グリーンに態度にスノビズムを感じ取っている。またウォーも「私には、神を愛するがために喜んで地獄に堕ちるという考えは、とてもいい加減な詩的表現か、あるいは常軌を逸した瀆聖である。なぜならそのような犠牲を受け入れる神は義の神でもなければ愛すべき神でもないからだ」³⁾と言っている。

一方でスコビーを擁護する意見も多い。たとえばデヴィタスはスコビーを「グリーンが登場人物の中でもっとも魅力的で同情すべき人物の一人」⁴⁾であると言い、「真に悲劇的ヒーロー」⁵⁾と評価している。またアーディナストーヴァルカンも、スコビーをカトリック教会のドグマに抵抗し、「超人的な愛という最も真実なるキリスト教の理想」⁶⁾を示した悲劇的人物と捕らえている。またR. W. B. ルイスはスコビーにキリストのイメージを見出している。⁷⁾

オーウェルやウォーに代表される批判はグリーン自身のカトリック観に向けられており、スコビーをめぐるのは作者と批評家が真っ向から対立しているという状況である。どうしてこのように議論は分かれるのだろうか。本論では、まずスコビーの過去と現在のつながりを検証し、スコビーとルイズの関係におけるスコビーの「あわれみ」と「責任感」の特徴と問題点を考察する。次いでスコビーとヘレン、スコビーと神との関係において「あわれみ」と「責任感」が与えた影響を分析し、スコビーの成長と墮落を考察する。そしてスコビー

は作者の言うように「残酷喜劇の主題」であるのか、そしてスコビーを通して作者が伝えようとするメッセージとは何かについて考察する。

Ⅱ スコビーの特徴と分かりにくさ

作品冒頭で描かれるスコビーの特徴は、並みはずれた「あわれみ」と「責任感」、それに人生に対する奇妙で消極的な態度である。そしてその特徴のためにスコビーは理解しづらい人物になっている。スコビーの「あわれみ」と「責任感」がおおいにその効果を発揮しているのは、修復不可能なほどにまで壊れかけたルイズとの夫婦関係においてである。結婚して14年が過ぎ、夫婦仲は冷え切ってしまっており、スコビーの情熱と愛は消え去って「あわれみ」が生き続けている状態だ。そして彼らが共にカトリック教徒であるということと、ルイズに対するスコビーの「あわれみ」と「責任感」とのおかげで表面的には夫婦関係を保っている。スコビーはシエラ・レオーネに赴任する前後にルイズと結婚し、その後ずっと単身赴任を続けている。一方でルイズは、一人娘のキャサリンとイギリスで暮らしていたが、キャサリンは3年前にイギリスの学校で亡くなり、その後スコビーの元にやってきたようである。現在のルイズの不満は、スコビーの愛情が完全に冷めてしまっていることと、文学や絵画を愛するという都会的センスの持ち主であるルイズが、狭いイギリス人植民地の社会に溶け込めず、完全に浮いた存在になってしまっていることである。ルイズは自分が嫌われ者になっている状況に耐えられず、健康状態もあまり良さそうでない。さらに作者は「女たちは誇りに頼っていた。自分自身への、自分の夫への、自分の境遇への誇りを頼りにして」(13)と書いているが、ルイズは彼女自身が植民地で受け入れられないだけでなく、夫であるスコビーが警察署長に昇進できなかったことで、ルイズはプライドをずたずたに引き裂かれ、いらだちを抑えることはできない。ルイズの希望は南アフリカで新生活を始めることであるが、ドイツ軍の潜水艦が付近の海洋に出没するために、シエラ・レオーネに足止めを食っている。ルイズの置かれた境遇は彼女の身体にも影響を与えており、蚊帳越しに見えるルイズの寝姿はスコビーに「皿覆いの中の骨付き肉」(16)を連想させる。しかし妻の「醜さ」が、スコビーに妻への生理的な嫌悪感をかき立てるわけではない。

その顔はアタブリン薬のような象牙色をしていた。かつては瓶詰めの蜂蜜色をしていたその髪は、今は黒っぽくて汗でねばついていた。彼が彼女を愛し、あわれみと責任感が激しい情熱に到達するのは、妻が醜く見えるこのようなときだった。(14)

ルイズの「醜さ」が自分のせいであるという強い「罪悪感」を抱いているので、スコビー

はルーズの愚痴に耳を貸し、食欲のないルーズをなだめすかせて昼食をとらせようとする。彼にとって「彼が愛する者の幸せを保つのはいつも彼の責任だった」(19)のである。さらにたびたび繰り返されてきた夫婦喧嘩においても、「人間関係においては、やさしさと嘘は千の真実よりも価値がある」(59)と考えるスコビーは、「愛している」と嘘をつき続け、妻にかけるセリフを練習してまで下手な芝居を打っている。一方でルーズはスコビーの芝居にはまったく乗らずに、「あなたは私を愛していないのよ」「私がない方があなたも幸せになれるのよ」と、嘘に対して真実でもってスコビーに応じている。やがてお互いが疲れ果てた末に、「おまえの幸せを願っている」と言うスコビーはルーズの南アフリカ行きを約束している。

「あわれみ」と「責任感」と同時に、現在のスコビーの理解しづらい特徴として、人生に対する消極的な生き方が挙げられる。スコビーの清廉潔白な生き方は、『権力と栄光』の警部に通じるものがある。妻のルーズも彼の「責任感」の強さは認めているし、警察署長もスコビーを「正義の人アリスティデス」(8)と呼んでいる。事実、モラルが完全に低下してしまったシエラ・レオーネで、他の多くのイギリス人とは違って、不正や女性問題とは無縁の状態で、15年間警察署の副署長として勤務している。しかし『権力と栄光』における警部が理想に燃えていたのに対して、スコビーは決して熱く、強く生きる人間ではない。それどころか語り手により描かれる彼の内面には、人生に対する奇妙で受身の態度が見受けられる。次期署長のポストをめぐる出世レースからは完全に脱落してしまっていて、それを悔しがる様子もない。またスコビーがイギリスに帰っている途中に同僚のフレーザーに宿舎を奪われ、立地条件の悪いバンガローに住まざるを得なくなった件に関しても、スコビーはフレーザーに対して、つとめて「良き負け手」(22)に甘んじようとしている。またスコビーの「壊れたロザリオ」(10)が示すように、宗教に対して強い関心を示すわけでもないし、「さびついた手錠」(6)が象徴するように、「正義感」が強いといっても、スコビーは不正を積極的に正すわけでもない。さらにスコビーは退職前に自らの死が訪れることを願っている。

さらに興味深いことに、多くのイギリス人にとって暮らしにくいシエラ・レオーネが、彼にとってはイギリス以上に暮らしやすい土地になっている。シエラ・レオーネで15年間無事に過ごせたこと自体がまれで、滞在期間がスコビーよりも長い人物は、22年間勤務してきた警察署長しかいない。警察署は「病院」(5)を連想させ、スコビーは1年半ごとに「黄色くなって神経質になった患者が故国に送り返される」(5)のをずっと目撃してきた。また警察署と裁判所は「弱い人間の大きな言壮語のような巨大石造建築」(6)と表現されている。これらは、シエラ・レオーネでは普通のイギリス人が体力的・精神的にそう長くは持ちこたえられないことと、己の優位さを誇示することが生存の必要条件であることを示している。事実、冒頭で描かれている電信検査官のハリスは、1年半の勤務で精神的に追い詰められている雰囲気漂わせている。そのようなイギリス人たちは自分たちだけの閉鎖的なクラブを作り、たとえイギリ

ス人であっても、ウィルソンのような新参者を排除しようとしている。ところがスコビーは、他のイギリス人とはまったく反対の方法でこの地に適合している。このことは彼のオフィスが象徴的に示している。

よそ者には飾り気のない、居心地の悪い部屋に思えたかもしれないが、スコビーにとってそこが家庭だった。他の人は物を蓄積すること——新しい絵、どんどんと増える本、奇妙な形の文鎮、いつのことだったか休日に何らかの理由で買った灰皿——で家庭の雰囲気をつくり上げていった。スコビーは物を減らすことで家庭を作り出した。(6)

R. H. ミラーはスコビーを「根を持たぬ人間」(“a man without roots”)⁸⁾と考え、「国も文化も、そして興味深いことに、哲学的・知的枠組みを持たぬ人間」⁹⁾だと指摘している。スコビーは作品中の他のイギリス人とは違って、イギリスとのつながりを示すものを捨てることでシエラ・レオーネに適応しているのである。その結果、スコビーはこのアフリカの植民地とこの土地の住人に対して、ほかのイギリス人には理解できないような、神々しいほどの愛情を持っている。

なぜ、と彼は死んだ野良犬を避けるためにハンドルを切りながら思った。おれはこの場所がこんなに好きなのだろう？ここでは人間性が自らを偽装するひまがないためだろうか？ここでは誰も地上の天国について語ることはできなかった。天国は死の向こう側のあるべき所に厳と存在していた。死のこちら側には、いたるところで人々がうまくもみ消している不正や、残虐さや、卑劣さが栄えていた。ここでは人間を、その最悪の部分を知りながらも、ほとんど神が愛するのと同じように愛することができた。ここでは見せかけのポーズや、きれいなドレスや、わざとらしくよそおわれた感情などを愛するのではなかった。(31)

スコビーの眼に映るシエラ・レオーネはこの世の「天国」とは到底言えず、むしろ「地獄」に近い。だからこそ死後の「地獄」と「天国」はまだ意味を持つのである。このことはスコビーの宗教観が深まる際の背景をなしている。さらに「見せかけのポーズ」「きれいなドレス」「わざとらしくよそわられた感情」などは、ルイズが象徴する世界である。ルイズはスコビーとは反対に、物を蓄積することでイギリス的な家庭の雰囲気をつくろうとし、スコビーが南アフリカでのルイズとの新生活で一番恐れたのがそのことである。またスコビーが警察署長に任命された場合に備えて、自分の勢力拡大のためにスコビーに取り入ろうとするシリア人商人のユーゼフに対してさえ愛情を感じているのも、ユーゼフの意図が単純・明快であ

るからだ。スコビーは、もう一度若者に返ったとしてもたった一人でこの生活を選ぶだろうと考えているが、非イギリス的で、むさくるしくて、人間関係が単純で気を使わなくて済む環境がスコビーにはうってつけである。

Ⅲ スコビーの語られない過去

読者は現在の理解しづらいスコビーを理解するために、その手掛かりをスコビーの過去に求めようとするが、語り手の操作によりスコビーの意識が過去に遡ることはあまりない。スコビーは過去とのつながりが断たれた現在のなかで生きているのである。スコビーの過去が十分に語られない理由の一つとして、山形はスコビーの「あわれみ」の源が明らかにされると、スコビー自身が読者の「あわれみ」の対象になってしまうからだと考えている。¹⁰⁾ しかしかろうじて語られるスコビーの過去と現在のスコビーの「あわれみ」、「責任感」それに「人生に対する奇妙な態度」とを考え合わせると、あるつながりが見えてくる。スコビーによって回想される過去は、多くの場合ルイズとの結婚式のときの「誓い」と娘のキャサリンの死にまつわるものである。たとえばスコビーがルイズと結婚したときに彼が誓った「誓い」について、語り手は次のように書いている。

愛を永遠に保障できる人などいないだろう。しかし彼は14年前に、イーリングで、レースの衣装やキャンドルのなかで恐ろしくささやかで上品な式を挙げたとき、少なくとも彼女が幸せであるように常に心がけようと心のなかで誓ったのだ。(60)

ここで「愛を永遠に保障できる人などいないだろう」と発言するのは、語り手であってスコビーではない。語り手が常識的な判断を示す一方で、スコビーは非常に善良な人間ではあることはわかるが、彼には永遠の愛を誓うことの困難さや、それに伴う挫折感に対する意識が欠けている。さらにスコビーが南アフリカ行きを望むルイズに対して「必ず何とかする」という約束をした後、語り手はスコビーの意識を次のように書いている。

こうした言葉からどんな結果が生まれるかあらかじめわかっていたとしても、それでもやはり彼はその約束をしたことであろう。彼はそれまでもいつも自分の行動の責任をとる覚悟はしていた。彼女を幸せにしようという心のなかでの恐ろしい誓いをしたとき以来、この行為が自分をどのようなところに追いやるか、いつも半ば自覚もしていた。絶望とは自分に不可能な目的を課す人間が支払う代償である。それは許されぬ罪だと言われているが、それは墮落した人間あるいは邪悪な人間が決して犯すことのない罪である。そうした

人間は常に希望を持っている。そうした人間は絶対的な失敗を知るという氷点に達することがない。善意の人間だけが常に心のうちに堕地獄の罪を犯すこのような能力を持っているのだ。(62)

上の引用文のうち、スコビーの意識は前半部分である（「恐ろしい」という形容詞はスコビーの意識であるのか、それとも語り手の評価であるのかは定かではない）。そしてスコビーは、不可能とも言える責任を負うことは、自分の安全にかかわるということをおぼろげながら意識している。しかし「絶望とは…」以下の発言は明らかに語り手の発言であり、「善意の人間は絶望にたどりつく」というパラドックスは、スコビーには思い付かないものだ。語り手はスコビーには気が付かない部分を自らのコメントとして付け加え、スコビーの過去と現在をつなげ、さらにスコビーの未来を暗示しているのだ。ここでようやくスコビーの過去と現在とがつながってくる。スコビーにおける「あわれみ」「責任感」「罪悪感」「絶望」の関係を考えると、スコビーの並みはずれた「責任感」は自分に対しては「挫折感」を生み、「挫折感」は「絶望」へと発展する。また他人に対しては「責任感」は「罪悪感」を生み、「罪悪感」は「あわれみ」を生みだす。スコビーにおいてはその無謀とも言える「責任感」が出発点である。そして「あわれみ」と、無気力とも言えるような奇妙で受け身の生き方は、その結果である。スコビーの過去が語られないという語りは、過去を思い出したくないというスコビーの意識の反映であり、「あわれみ」と「責任感」が現在のスコビーにおいて重荷になっていることを表現している。

反対に、スコビーが執拗に求めている「心の平安」(60)についての考察は、スコビーが「責任感」と「あわれみ」に苦しむ状況を明らかにする。スコビーはこの作品の中で幸福を三度感じている。一度目はねずみがいる浴室に一人きりでいるとき、二度目はベンバートの自殺の処理のために召使のアリと一緒にバンバに出かけたとき、そして三度目はルイーズを南アフリカに送り出した日の深夜である。浴室は彼のオフィスと同じく彼自身の世界であり、彼が一人きりになれる場所である。またアリとバンバに出かけたとき、車中でアリの笑顔を見てスコビーは「これは愛や友情に関して彼が必要とするすべてであるように思われた。この世でこれさえあれば彼は幸せだった」(93)と感じている。唯一共にいて喜び合えるのは、ルイーズとの結婚生活よりも長くこの地で共に暮らしてきたアリである。アリに対しては「責任感」も「あわれみ」も感じなくてすむから、スコビーはアリには気を許せるのである。さらにルイーズを南アフリカに送り出した後、スコビーはまったくの孤独の中で幸せを感じている。

道と屋根と傘に降り注ぐ雨音をのぞいて、絶対的な静寂があった。ただうめくようなサイ

レンの消え行く音が、しばらくの間耳のそばで震えていた。後になって、スコビーには、これは彼の到達した幸せの頂点であるように思えた。暗闇の中に、一人きりで、雨に打たれ、愛もあわれみもなく。(153)

スコビーがこの時点を「幸せの頂点」と考えるには理由がある。ルイズは無事南アフリカについている（したがってスコビーはルイズを幸せにできたと感じている）。またこの場面は、スコビーが少女の臨終の場面に立ち会った直後で、もはやスコビーには引き受ける責任がなかったからである。スコビーの「心の平安」とは、一人きりで、誰に対しても「責任感」と「あわれみ」を感じなくてすむ状態なのである。

スコビーにとって「心のなかでの恐ろしい誓い」と同様に重要な記憶は、娘のキャサリンの死である。スコビーは後に愛人となるヘレンに、ルイズから送られたキャサリンの危篤と死を告げる電報が逆に届き、先に娘の死を告げる電報が届いてその後に危篤を知らせる電報が届いたエピソードを語っている。そのときスコビーは、後で届いた電報を読んで「これで不安が始まる、苦痛が始まる」と感じ、その理由を、死んだら「忘れることができるから」と答えている。普通ならば、「死」から「危篤」という順序で電報が届いたならば、そこに希望を抱くはずである。娘を愛するがゆえに、スコビーは大きな「責任感」と深い「あわれみ」を感じていたのであろう。また娘のことをめったに思い出さない理由として、「娘が死ぬのを見ないで済んだから」(179)と答えている。「娘が死ぬのを見ないで済んだから」という表現は以前にも出てきている。第2巻第1部第3節で、スコビーはある少女の死に立ち会うことになるが、スコビーはこのとき「彼自身の子供が死んだとき彼はアフリカに来ていた。彼は子供の死を見なくて済んだことをいつも神に感謝していた」(140)と感じている。娘の死に立ち会わずに済んだことを神に感謝し、娘の死に立ち会わなかったから思い出すこともないという心理は、スコビーの「責任感」「罪悪感」さらには「あわれみ」からの逃避・解放を意味しているのであろう。また子供の死を看取る際のスコビーの意識は「注意深く埋めておいた記憶がよみがえってきた」(141)と表現されている。この「注意深く埋めておいた」という表現には、スコビーが意識的に忘れ去ろうとしている様子がうかがえる。娘の死という悲劇を、つとめて「思い出すまい」というスコビーの意図が感じられ、反対に過去に引きずられるスコビーの姿が浮かび上がる。

Ⅳ スコビーの問題点

過去から切り離された語りは、スコビーが過去を清算できていない様子を物語り、スコビーの生き方にも大きな影響を及ぼしていることを考察してきた。スコビーの警察官として

の経験の豊かさを高く評価する意見もあるが¹⁴⁾、ベテラン警察官でありながらスコビーの現状に対する認識は甘く、誤解や判断ミスを招いてしまっている。たとえばユーゼフは、ウィルソンの正体が、民間人ではなくてダイヤモンドの密輸を捜査するために本国から派遣された捜査官であることを見抜き、二度にわたりスコビーに警告を発した。またウィルソンから一方的に愛を告白されたルイズは、「ウィルソンは信用できない、ウソをつく」とスコビーに報告している。しかしスコビーはウィルソンに対して不思議なほど警戒心を抱かず、逆にウィルソンにルイズとユーゼフとヘレンのことで疑惑を持たれてしまう（皮肉にもウィルソンが想像した通りことが運んでしまうのだが）。またスコビーは、ポルトガル船の船長が隠し持っていた娘宛の違法な手紙を、「あわれみ」のために規則を曲げて開封してしまう。問題となるのは、あれほどまでに規律に敏感なスコビーが、なぜ容易に「あわれみ」に流されてしまったかである。スコビーは船長の人生に「責任感」を感じていたわけではないが、後にスコビーが「方向が180度転換したのは、あの娘だった」（56）と考えるように、船長は手紙が娘宛であることを強調し、「あなたにも娘があれば分かってもらえるでしょう」（49）と言ひ、偶然にもスコビーに亡くなった娘を意識させてしまったのである。スコビーが娘に抱いていた「罪悪感」が、船長に対する「あわれみ」を掻き立てたのである。スコビーが手紙を焼き捨てるときに、語り手はスコビーの意識を次のように描いている。

彼自身の心臓の鼓動だけが彼の罪を告げていた ―― 彼が不正を犯した警官たちの仲間入りしたことを ―― 別の町に貴重品安全庫を持っていたベイリー、ダイヤモンドを所持しているのが見つかったクレイショール、はっきりした証拠は挙がらなかったが病気退職させられたボイストンの仲間。彼らは金のために不正を犯したが、彼は感傷のために不正を犯したのだ。感傷の方がいっそう危険だった。なぜなら感傷には値段の付けようがないからである。賄賂に負ける人間はある金額以下までは信用できる。しかし感傷は一つの名前、一枚の写真、一つの匂いを思い出すだけでも、心を溶かしてしまうからである。（55-56）

この引用において、語り手はスコビーの意識の描写をさりげなく自らのコメントへと変化させている。「不正を犯した警官の仲間に入った」と考えているのはスコビーであるが、「金よりも感傷の方が危険である」と判断するのは語り手である。スコビーは警察官として何度も修羅場を経験して来ているはずであるが、「感傷」（あわれみ）の腐食作用を理解しているとは言えない。

夫婦関係においては、スコビーはルイズにやさしい嘘をつき続け、白々しい芝居を続けて来た。はたしてスコビーは、今までにどれほどルイズと真向かいになろうとしたであろうか。作者は、この作品には技術的欠点があって、ルイズは主にスコビーの目を通して眺

められるので、読者には「彼は妻の激しさによって破滅の運命に追い込まれていく」(xiv) ように思える、つまりスコビーが読者の同情を買う一方で、ルイズが悪妻として読者に印象付けられてしまうと書いている。確かにルイズは、愚痴をこぼし、経済的に苦しいことを承知の上で南アフリカ行きを求め、スコビーの愛情の欠如を辛辣に批判している。しかし1年半ごとにイギリス人が健康を害して故国に帰っている事実を考えると、ルイズが慣れない土地で3年間がんばったのは事実である。またスコビーがバンバにペンバートの自殺の処理のために行き、熱病のために1週間遅れで帰宅した夜、ルイズがスコビーに示したのは、予想に反して体調をいたわるやさしさであり、スコビーに対する詫びである。つまりこの1週間はルイズにとっての冷却期間で、ルイズは冷静に自分の立場をよく考え、環境に順応しようとしているのである。問題なのは、スコビーがルイズを南アフリカに行かせることを決心した過程に、スコビーの側の読み違いがあり、お互いの十分な了解があるようには感じられないことである。ユーゼフ以外に渡航費用を貸してくれる者がいないスコビーは、もともとルイズにもう6カ月間ここにとどまるように言うつもりだった。しかしこのことを切り出せなかったのは、スコビーがルイズのなかで南アフリカ行きの問題が決着していることを理解できず、「やさしさ」を示したルイズを失望させたくなかったためである。またスコビーはバンバ滞在中に、ペンバートの自殺に影響を受けて、ルイズが自殺する夢を見ていた。そしてこの場面でルイズの様子が不安になり、スコビーはルイズにその懸念をほめかしている。このときルイズは「私たちにはそんなことは起こらない」(108) と言っているが、スコビーにはその言葉に込められた宗教的な意味合いが伝わっていない。ルイズのカトリックに対する態度は表面的で形式的ではあるが、カトリック教徒であるルイズには自殺は考えられない問題である。さらにルイズが南アフリカ行きにこだわったのは「熱病」(108) みたいなもので、もう「熱」は冷めたこと、さらに自分の手術費用のために渡航費用が準備できなかったこと（つまり自分が悪いこと）を認めた上で、スコビーにアフリカ行きの断念を詳しく説明し、断りの手紙を書いていると、スコビーは突然「行くと書いてあげなさい」(108) と早口で言う。しかし語り手により説明されるスコビーの意識は、「言葉を取り返しのつかないところまで出してしまいたかった」(108) である。二人で将来についてじっくりと話し合っただけの結論ではなく、スコビーが妻への「あわれみ」と「罪悪感」、それに心配のために勢いで言った言葉であることが分かる。この結果スコビーは手練手管にたけたシリア人商人のユーゼフに借金をし、やがて彼の術中にはまり、汚職に手を染めることになる。

どうもスコビーの「あわれみ」と「責任感」は建設的なものではないようだ。特にスコビーとルイズの関係においてはそうである。アトキンズはスコビーの「あわれみ」を批判して、「愛は創造的であるのに対し、あわれみは破壊的だ」と述べているが¹²⁾、スコビーの「あわれみ」と「責任感」が創造的に作用しない理由は、それらには「愛」とはかけ離れた倫

理的な問題が含まれているからだ。作者は「序文」の中でこの物語のテーマが「共感とは別のあわれみの人間に対する悲惨な効果」(xiii-xiv)だと述べ、スコビーは「あわれみがほとんど醜いごうまんさの表現になりうる」(xiv)ことを示すべく作られたと言っている。つまり「共感」と「あわれみ」は異なるものであり、「共感」が相手と同じレベルに立って感じる感情であるのに対し、「あわれみ」は自分が相手より上の立場に立った上で感じる感情であるということだ。さらに作者はあるインタビューの中で、「スコビーはヒーローではないのか？」という問いに対して、次のように言っている。

ちがう。彼は善良な意図を持った弱い人間で、ごうまんさによって運命付けられている。悪魔的なごうまんさではなく、われわれの多くが持っている種類のごうまんさだ。そしてそれは他人の人生をどうにかしてやれると彼に感じさせている。¹⁹⁾

つまりスコビーの意図は善良ではあるが、彼の「あわれみ」は、より上の立場から相手に対して感じる感情だけでなく、そこには「他人の人生をどうにかしてやれる」という「ごうまんさ」が含まれているということだ。スコビーの問題は、その「ごうまんさ」を「責任感」と勘違いし、「あわれみ」と「責任感」にエゴイズムが含まれていることに気が付かないことである。この場合、「あわれみ」をかける側とかけられる側の間には相互の理解はない。スコビーはルイズに対する表面的な「やさしさ」が「愛」だと勘違いし、彼女を悲しませないことが「守る」ことだと思っている。したがって両者の間にはなかなか根本的な解決方法がなく、いざとなると誤解が生じるのである。バンバから戻ってルイズから「いたわり」を示されたとき、スコビーが感じたのは以下の通りである。

何年もの間彼の頭に思い浮かばなかったこと、それが思い浮かんだ。彼女が彼を愛しているということが。かわいそうに、彼女は彼を愛していた。彼女は自分自身の責任感を持った立派な一人の人間であって、彼の心配と親切の単なる対象ではなかった。挫折感が彼の周りで深まった。(107)

スコビーは、ルイズが反省の後に自分の非を認めることができる一人前の人間であることをこの時点で気が付いていたのだ。スコビーはルイズを一人前の大人として取り扱い、「アフリカには行かない」というルイズの選択を尊重すべきであった。それこそが作者が言う「共感」である。スコビーは「挫折感」を感じているが、これは「自分がどうにかしようとしてできなかった」という「挫折感」であり、スコビーは自分を許せなかったのだ。

V スコービーの苦悩と進化

ペンデの教会の仮設病院で戦争被害者たち——特にある少女とヘレン——との出会いにより、スコービーの「あわれみ」と「責任感」には新たな一面が加わることになる。この場面は多くの批評家に注目され、作品の「情緒の中心」¹⁴⁾、あるいはスコービーの経験の「ターニングポイント」¹⁵⁾と評されている。この少女は、乗っていた船がドイツ軍の潜水艦に沈められ、他の乗客とともに40日間海上を漂流した後、ペンデまで運ばれてきた。そして彼女は両親がすでに亡くなっていることを知らない。瀕死状態で口を開けたままの少女をはじめ、結婚直後にもかかわらず夫を失い、切手アルバムを抱きしめた19歳のヘレンを見て、スコービーは次のように感じている。

まるで一つの責任を終えたと思ったら、結局別の責任を引き受けたかのようなだった。これは彼が全人類と分かち合っている責任だったが、それは何の慰めにもならなかった。というのは、ときどき彼が自分の責任を認識している唯一の人間であるように思われたからだった。(137)

「一つの責任」とはルーズを南アフリカに行かせることである。スコービーは少女とヘレンの悲惨な姿に新たな「あわれみ」と「責任感」をかき立てられている。しかも今回は家庭内の個人的な問題から、戦争という人類全体がかかわり、「現実には誰が悪いとも言えない」(137)問題へとスケールが大きくなっている。事務的に病人を診察する医師とは違って、戦争の悲惨な結果を目の当たりにして、スコービーは「自分の責任」が問われているような気になっているのだ。両親を失って瀕死の状態である少女を見てスコービーが思うことは、自らの創造物である人間を40日間も生きながらえさせた神の愛への不信——不条理に対して黙する神への不信——であり、この悲惨さに満ちた世の中で幸せを期待することの愚かさである。スコービーは「幸福な人間がいたら教えてほしいくらいだ。おれはそいつの極端なエゴイズムか、邪心——あるいは絶対的な無知を示してやろう」(139)と考えている。ただ「もし事実を知ったものは、星に対してさえもあわれみを感じなければいけないのだろうか。いわゆることの核心に到達したら？」(139)とも考え、人間存在の不条理に対して介入しない神の代わりに「責任」を引き受けて行くという絶望的なしんどさを感じている。

大きな「責任」を感じているスコービーは、牧師の妻から少女の面倒を看るように言われ、その場から逃げようにも逃げられない。このときのスコービーの心理は語り手により次のように描かれている。

その子供を見たとき、彼には聖体拝領用の白いベールが彼女の顔にかかっているのが見えた。それは蚊帳に当たった光のトリックと彼自身の錯覚だった。彼は両手で顔を覆って、見ようとしなかった。彼自身の子供が死んだとき、彼はアフリカに来ていた。彼は子供の死を見なくて済んだことをいつも神に感謝していた。だが人は結局ものごとから逃げ切ることができないように思えた。人間であるためには、人はこの苦い杯を飲まなければならない。ある日は運よく、また別の日に臆病のために逃げることができても、三度目は目の前に差し出されるものだ。(140)

スコビーはその少女と自分の娘とを重ね合わせていて、言わばキャサリンの臨終の場面に今立ち会っているのだ。そして子供がスコビーを自分の父親と錯覚して「お父さん」(140)と言ったとき、スコビーは「これこそおれが立ちかわずに済んだと思ったことだ」(140)と考えている。逃げ出すことができないスコビーは、この場面で恐怖と必死に戦い、子供が苦しまないように「注意深く埋めておいた記憶」(140)を呼び起こし、子供を手で作った影絵であやしながら安楽のうちに死なせてやっている。結果としてスコビーは父親としての責任を果たし、過去と対峙できたのである。

少女の死に立ち会った経験は、スコビーにとってはキャサリンの死の代替経験であり、ヘレンとの関係は、恋人同士の関係というよりは父と娘の関係である。二人の関係はスコビーのヘレンに対する「あわれみ」と「責任感」から始まった。救出されたときのヘレンの瘦せて緩くなった結婚指輪と握りしめた切手アルバムが、スコビーの脳裏に焼き付いて離れない。退院後たまたまスコビーの近所に引っ越ししてきたヘレンのために、収集用の切手を持ってきたスコビーは彼女と意気投合し、次のように感じている。

ここ何年もの間、他人といてこれほど気楽に感じたことはないように思われた——ルイーザが若かったとき以来。しかし今回は違ふと彼は自分自身に言った。二人はお互いに安全だ。彼は30歳以上も年上なのだから。彼の体はこの気候のなかで情欲の感覚を失っていた。彼は悲しみと愛情と限りないあわれみとでもって彼女を見守った。と言うのも、いずれは彼女が途方に暮れているこの世界で、彼が案内役をしてやれなくなるときが来るだろうから。彼女が振り向いて光がその顔に落ちたとき、彼女は醜く見えた、子供が一瞬見せる醜さだ。その醜さは彼の手首にはめられた手錠のようだった。

.....

彼は、美人、優雅な人、知性的な人に対しては全く責任感を感じなかった。彼らは自分たち自身でやっていける。彼の忠誠心を要求したものは、誰もわざわざ道を外れて見ようと思わない顔、決して盗み見を受けない顔、すぐに拒絶と冷淡に慣れてしまう顔だった。

「あわれみ」という言葉は、「愛」という言葉と同じように、おおざっぱに用いられている。本当は、経験する人などほとんどいなくらい恐ろしい見境のない情熱なのだ。(183-184)

この引用で明らかになることは、スコビーがヘレンを一人の女性として意識しているのではないことだ。スコビーは、子供に対する父親あるいは保護者の愛情としての「あわれみ」と「責任感」でもってヘレンに接している。この点でスコビーとヘレンの関係は、ウィルソンとルイズの関係、さらにバグスターとヘレンとの関係とは全く質を異にしている。ウィルソンは年齢の割に未熟で、ルイズへの恋愛感情は純粋なように見えるが、根底には自己中心的な欲望が隠されている。またしばしばヘレンに言い寄っているバグスターは「無責任さ」の代名詞である。スコビーは、本来は「責任」を負う義理のないヘレンに、まるで父親のごとく「責任」を引き受けたのであり、スコビーが病院での少女の死の場面を経て、「あわれみ」と「責任感」のスケールを広げていったと考えられる。

しかし引用の後半は、「醜さ」に対するスコビー独自の「あわれみ」に焦点が当てられている。すでにルイズの例を通して、「醜さ」に対するスコビーの「あわれみ」にエゴイズムが潜んでいて、それに気が付かないスコビーに判断の甘さがあることを確認した。語り手はここでも「あわれみ」が「恐ろしい見境のない情熱」だとコメントを挟んでいるが、スコビーはまだその恐ろしさに気が付かない。この場面でもスコビーは判断ミスを犯してしまう。ヘレンは夫の死を簡単に乗り越えた自分を「ひどい女」(178)と表現し、スコビーも「彼女が人生で学ぶレッスンのそのような段階、そのような大人びた考え方ができるほどになっている」(178)ことに驚いている。しかし「あわれみ」のために、スコビーはヘレンに対して「自分がどうすべきか分からない女」(181)という勝手なイメージを膨らませているのである。この後、酔った勢いでヘレンの部屋に来たバグスターを居留守を使って追い返すことを期に、二人は一線を越えてしまう。作者は「彼らが二人とも安全と思っていたものは、実は友情、信頼、あわれみの名において働きかける敵のカモフラージュであったのだ」(184-185)とコメントしているが、人生経験が豊かなはずのスコビーにとって、「安全」とスコビーに判断させた経験は役に立っていない。

皮肉にも短期間のうちにヘレンはルイズのように不満の多い女性になり、周囲に知られないようにというスコビーの「用心深さ」が気に入らず、「手紙もくれない」と言い出す。スコビーとヘレンの擦れ違いは、次の会話が象徴的に表している。

「ねえ、君」と彼は言った、「喧嘩するにはまだ早すぎるよ」

「あの女」と彼女は彼の目を見つめて繰り返した。「あなたは決してあの人と別れない

でしょうね？」

「おれたちは結婚しているんだ」と彼は言った。

「あの人にこのことがばれたら、あなたは鞭打たれた犬みたいに帰っていくんでしょう？」
彼はやさしい気持ちで思った、この女は最上の本を読んでいないんだ、ルイズと違って。

「わからないよ」

「あなたはきっと私と結婚しないでしょうね？」

「できないんだ、君だって分かっているだろう」

「カトリックであるって、素晴らしい言い訳だわ」と彼女は言った。「私と寝ることは構わなくても——私と結婚することだけはできないなんて」

・・・・・・・・

「さあ」とヘレンは言った。「ご自身の言い訳を言いなさいよ」

「ずいぶん長い話になるだろう」と彼は言った。「まず神の存在を証明するところから始めなければならないだろう」

「なんてひねくれ者なの、あなたって」(206－207)

この会話で、ヘレンはひそひそとしてしかも父と娘のような関係にがまんがならず、結婚を望んでいる様子が見え隠れする。スコビーの目を見据え、顔を見たこともないルイズのことを「あの女」と言い、嫉妬心を燃やしているヘレンは19歳とは思えない。そうしたヘレンに対し、スコビーはルイズと離婚した上でヘレンと結婚することが無理な理由として、彼自身とルイズがカトリックであることを挙げている。しかし父親が聖職者でありながら、信仰心をなくしてしまったヘレンには、スコビーがいくら大真面目に答えようとも、スコビーの宗教上の理由は単なる言い訳にしか聞こえないのである。スコビーはヘレンに「おれは君を守もろうとしているんだ」(206)、「君を前よりも幸せにするつもりだった」(207)と言い、より大きな「責任」を引き受けた。スコビーの意図には悪意はないのだろうが、「ヘレンの人生をどうにかしてやる」という隠されたエゴイズムのために、スコビーには「共感」の上に立った共通の目的を見出しようがない。またスコビー自身にも、その「幸せ」が何を意味するのかははっきりしない。ルイズの場合と同じように、スコビーは相手の要求を安易に受け入れることが「悲しませないこと」で、それが「幸福」だと勘違いしている。スコビーは大胆なラブレターをヘレンに書き、後にそれがユーゼフの手に入ることになる。(続)

注

- 1 Graham Greene, Introd., *The Heart of the Matter* ("The Collected Edition," London: William Heinemann & The Bodley Head, 1971), p. xiii. 以下この作品からの引用はこの版により、該当ページ数のみを記す。
- 2 George Orwell, "The Sanctified Sinner," Samuel Hyness (ed.), *Graham Greene: A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1973), p. 107.
- 3 Evelyn Waugh, "Felix Cupla?," Hyness (ed.), *Graham Greene*, p. 101.
- 4 A. A. DeVitis, *Graham Greene*: Revised Edition (Boston: Twayne Publishers, 1986), p. 86.
- 5 *Ibid.*, p. 92.
- 6 Daphna Erdinast-Vulcan, *Graham Greene's Childless Fathers* (New York: St. Martin's Press, 1988), p. 53.
- 7 R. W. B. Lewis, "The 'Trilogy,'" Harold Bloom (ed.), *Graham Greene: Modern Critical Views* (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p. 30.
- 8 R. H. Miller, *Understanding Graham Greene* (Columbia: University of South Carolina Press, 1990), p. 74.
- 9 *Ibid.*, p. 80.
- 10 山形和美『グレアム・グリーンの文学世界—異国からの旅人—』(東京: 研究社出版、1993)、p. 232.
- 11 Jae-Suck Choi, *Greene and Unamuno: Two Pilgrims to La Mancha* (New York: Peter Lang, 1990), p. 102.
- 12 John Atkins, *Graham Greene* (London: John Calder, 1957), p. 166.
- 13 Graham Greene & Christopher Burstall, "Graham Greene Takes the Orient Express," Henry J. Donaghy (ed.), *Conversations with Graham Greene* (Jackson: University Press of Mississippi, 1992), p. 55.
- 14 Kenneth Allott & Miriam Farris, *The Art of Graham Greene* (New York: Russell & Russell, 1963), p. 238.
- 15 Kai Laitinen, "The Heart of the Novel: The Turning Point in *The Heart of the Matter*," Robert O. Evans (ed.), *Graham Greene: Some Critical Considerations* (Lexington: Kentucky Paperbacks, 1967), p. 169.

(たまい・ひさし 外国語学部教授)